令和４年度「高校生ステップアップ・プログラム」

実　施　報　告　書

１　「高校生ステップアップ・プログラム」とは　Ｐ１

２　各指定校の取組（23校）

空知	（１）北海道夕張高等学校	Ｐ２
	（２）北海道長沼高等学校	Ｐ３
	（３）北海道栗山高等学校	Ｐ４
石狩	（４）北海道札幌白陵高等学校	Ｐ５
	（５）北海道江別高等学校	Ｐ６
	（６）北海道札幌北高等学校（定時制）	Ｐ７
	（７）北海道札幌琴似工業高等学校（定時制）	Ｐ８
	（８）北海道有朋高等学校（定時制）	Ｐ９
後志	（９）北海道倶知安農業高等学校	Ｐ10
胆振	（10）北海道白老東高等学校	Ｐ11
	（11）北海道鵡川高等学校	Ｐ12
	（12）北海道追分高等学校	Ｐ13
日高	（13）北海道平取高等学校	Ｐ14
渡島	（14）北海道松前高等学校	Ｐ15
	（15）北海道函館商業高等学校（定時制）	Ｐ16
檜山	（16）北海道上ノ国高等学校	Ｐ17
上川	（17）北海道鷹栖高等学校	Ｐ18
留萌	（18）北海道遠別農業高等学校	Ｐ19
宗谷	（19）北海道礼文高等学校	Ｐ20
オホーツク	（20）北海道清里高等学校	Ｐ21
十勝	（21）北海道音更高等学校	Ｐ22
釧路	（22）北海道標茶高等学校	Ｐ23
根室	（23）北海道別海高等学校	Ｐ24

３　高校生ステップアップ・プログラム実施要項

北　海　道　教　育　委　員　会

「高校生ステップアップ・プログラム」とは

1　趣旨

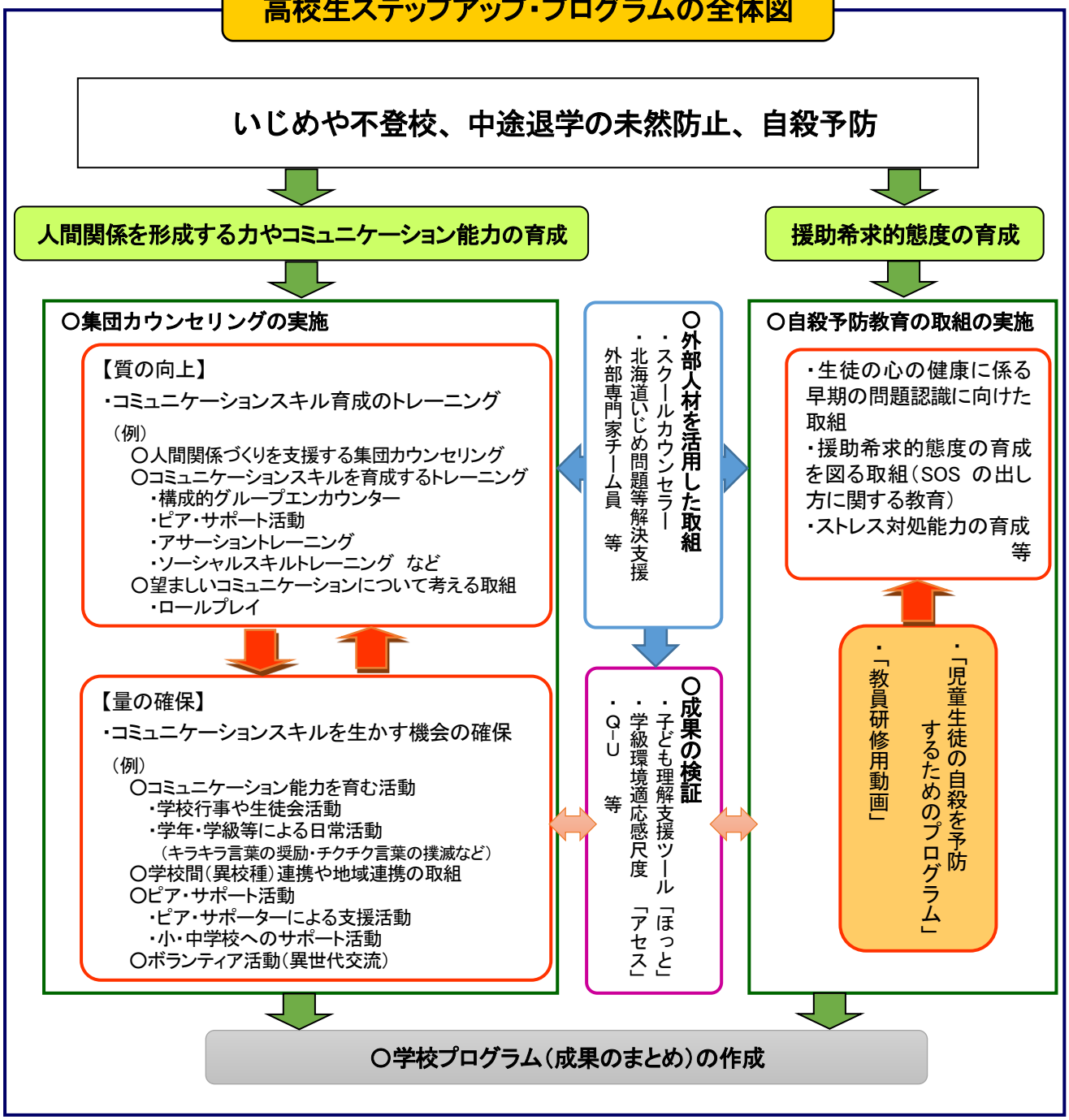
高校生のいじめや不登校、中途退学の背景として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものもあり、心の不安定さからいじめや不登校、中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、北海道学校保健審議会の調査では、自殺や死について考える児童生徒が一定程度いるという結果が出ていることから、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校におけるいじめや不登校、中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組（以下、「集団カウンセリング」という。）や、自殺予防教育プログラムを活用した取組を実践するとともに全道の高等学校への普及を図る。

2　事業内容

(1) 集団カウンセリングの実施
(2) 自殺予防教育の取組の実施
(3) 外部人材を活用した取組の実施
(4) 成果の検証
(5) 学校プログラムの作成

高校生ステップアップ・プログラムの全体図



北海道夕張高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：51 名

本校の目指す生徒像
・心豊かな生徒
・知性を磨く生徒
・主体的に行動する生徒

本校の現状
小・中・高と固定化した人間関係の中で、他者との関わりに関する悩みや困りごとを抱えている生徒が見られる。

本校の取組の特徴
1　スクールカウンセラーによる集団及び個別カウンセリング
2　アセスメントツール「心と身体のチェック」の結果を活用した教員による個別面談

取組の内容

○　自殺予防教育の取組
1　スクールカウンセラーによる集団及び個別カウンセリング
(1) 集団カウンセリング
ア　２・３学年「上手な助けの求め方」
目的：援助希求について理解を深め、悩んだ時に、必要に応じて他者に助けを求めることができるようにする。
生徒の感想：相談すること、人に頼ることはとても大事だと改めて思った。
イ　３学年「感情のコントロール（失うこと、別れることと悲しみ）」
目的：対象喪失への理解を深め、心の中で生じる「悲しみ」の感情との上手な向き合い方について考える。
生徒の感想：悲しむことの大切さや回復までの段階について知ることができた。
ウ　１学年「めげない心の作り方」
目的：「考え方」、「感情」、「行動」のつながりについて理解を深め、ストレスを抱えた場面で適切に対処できるようにする。
生徒の感想：考え方や行動によって、感じ方や気持ちが変わることが分かった。
(2) 個別カウンセリング
ア　放課後、希望した生徒を対象に実施
イ　個別カウンセリング実施後、関係教員とスクールカウンセラーによる情報交換の場を設定し、今後の生徒支援などについて協議
2　アセスメントツール「心と身体のチェック」の結果を活用した教員による個別面談
(1) 夏季休業後に実施した「心と身体のチェック」の結果を活用し、全校生徒を対象に個別面談を実施した。
(2) 希望した生徒を対象に、スクールカウンセラーによる個別カウンセリングを実施した。

取組の成果等

○　成果
スクールカウンセラーによる集団カウンセリングの実施により、援助希求的態度及びストレス対処能力の育成・向上を図ることができた。
○　課題
「心と身体のチェック」の結果や個別面談に関する情報の共有が十分に図れなかったため、全教員での実施時期や実施方法について改めて検討する必要がある。
○　次年度に向けて
スクールカウンセラーと連携し、「心と身体のチェック」を実施する目的や結果の活用方法について確認する研修会などを行う。

令和４年度高校生ステップアップ・プログラム

北海道長沼高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：112 名

本校の目指す生徒像
・生活習慣・マナーを身につけた生徒
・集団の中で活動する生徒
・進路実現に向けて自らを見つめる生徒

本校の現状
・コミュニケーションがうまく取れず、孤立傾向にある生徒への支援が必要
・社会性や対人関係を構築するための施策が必要

本校の取組の特徴
外部講師を活用して
１　人間関係を形成するコミュニケーション能力の育成
２　差別や偏見をなくすとともに、人権を尊重する態度の育成

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組
１　人間関係を形成するコミュニケーション能力の育成
ア　北海道医療大学教員（教授）を講師とする講話及びグループワーク
生徒の社会的なスキルアップや心の健康増進を図ることができた。また、より良い集団にしていくための多くのヒントを得ることができた。
イ　日本ファシリテーション協会による話合いの技法についての講話及びグループワーク
話合いのマナーとコツを身に付け、相手に嫌な思いをさせない良好な関係を築くコミュニケーションの在り方について学ぶことができた。
ウ　株式会社「地球はメリー・ゴーランド」の職員を講師とするコミュニケーションスキルトレーニング
コミュニケーションカードを使用して、個性を発揮し、自分らしく豊かに生きる気持ちとスキルを養い、自己理解・他者理解を深めることができた。
２　差別や偏見をなくすとともに、人権を尊重する態度の育成
ア　アイヌ民族学習（ウポポイ見学）
アイヌ民族の文化、芸術、歴史、現代社会における課題から、多様性を尊重する気持ちや社会の在り方について考えることができた。
イ　北海道レインボー・リソースセンター（L-Port）職員を講師とする講話
性の多様性及び性的マイノリティについて理解を深め、自分と異なる他者との共生について学び、社会の多様性について考えることができた。
ウ　朗読塾・チームいちばん星による舞台の鑑賞
「生きる力」をテーマにした朗読・歌による舞台鑑賞を通して、生きることの意味を考えることができた。
※　「心と身体のチェック」結果を教職員で共有し、日常的な観察や声かけに活用した。

取組の成果等

○　成果
・多くの分野の外部講師を活用したことにより、様々な角度から生徒に対してアプローチすることができ、どの生徒にとっても深く学ぶことのできるプログラムとなった。
・自分及び他者を大切にする気持ちを養うためのプログラムを実施したことにより、良好な人間関係を築こうとする意識を醸成することができた。
○　課題
・本プログラムを全校的な取組とするため、全教員が関わりを持てるよう業務内容を整理する必要がある。
○　次年度に向けて
・全教員が関わりを持つことができるよう、取組内容の精選と年間指導計画の見直しを行う。
・町内の小中学校と連携した取組となるよう検討する。

令和４年度高校生ステップアップ・プログラム

北海道栗山高等学校

課　程：全 日 制
学　科：普 通 科
生徒数：111 名

本校の目指す生徒像

・主体的に知性を磨き、豊かな情操を身につける生徒
・豊かな自然に親しみ、強固な心身を鍛えていく生徒
・勤労を愛し、奉仕の精神を持ち社会貢献できる生徒

本校の現状

素直な生徒が多いが、コミュニケーションスキルや人間関係の構築に課題を抱える生徒が見られる。
不登校傾向の生徒に対するケアが必要である。

本校の取組の特徴

1　専門家からの指導助言及び教職員研修による教職員のカウンセリング力の向上
2　日常から困り感を持つ生徒のストレス対処能力及びコミュニケーションスキルの育成
3　不登校傾向の生徒に対する支援

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　専門家からの指導助言及び教職員研修による教職員のカウンセリング力の向上

・全校生徒に対して、４月と 11 月に教育相談週間を設定し、全ての教職員が生徒と面談を行い、生徒の日常の不安や悩み等を把握するとともに、全教職員で情報の共有を図った。

2　日常から困り感を持つ生徒のストレス対処能力及びコミュニケーションスキルの育成

・１学年を対象に「社会性向上トレーニング」として、講師を招いた集団カウンセリングを行い、ストレスへの対処方法について学習した。
・１学年を対象に、保健講話を実施し、性の多様性やデートDVについて学び、自他ともに認め合う人間関係の育成を目指した。
・２・３学年の保健の授業では、自殺予防の観点から、意思決定と行動や心の問題について学習し、自殺予防教育を行った。
・スクールカウンセラーによる講話を行い、誰かに悩みなどを相談することの重要性や心身の健康についての理解を深めた。

【コミュニケーションスキルアップ講座の様子】

【社会性向上トレーニングの様子】

3　不登校傾向の生徒に対する支援

・保健室等の別室での学習支援を継続的に実施した。
・登校できない時には、電話やオンラインでのカウンセリングを実施した。

※　子ども理解支援ツール「ほっと」を実施し、生徒のコミュニケーションスキルの現状と課題を把握し、教職員間で共有した。

取組の成果等

○　成果

・教職員による生徒への面談を通して、生徒と教職員の信頼関係が深まったことにより、生徒が自己肯定感を高める機会が増えた。
・級友を気遣う心が高まるなど、コミュニケーションスキルが向上したことにより、良好な人間関係を築くことができ、クラスの団結力が向上した。

〈生徒からの意見（アンケート等から）〉
・自分自身を客観的に捉えることができるようになった。
・個々の多様性について理解し、集団としてお互いを思いやる気持ちが芽生えた。
・自分の進路について、具体的に考えるようになった。

○　課題

生徒の主体性を育むため、地域の関係団体と連携したフィールドワークや課題学習を通して、生徒のコミュニケーション能力や自己肯定感をさらに高めていく必要がある。

○　次年度に向けて

北海道介護福祉学校を中心に、地域の小中学校や福祉施設との調整を図り、連携を深めていくことによって、生徒の自己肯定感をさらに高めるとともに、本校生徒として相応しい「人間力」の育成を図っていく。

北海道札幌白陵高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：300 名

本校の目指す生徒像
・感謝の心を持ち、社会に貢献する生徒
・自ら進んで視野を広め、知性を磨く生徒
・心身を鍛え、たくましく生きる生徒

本校の現状
・生徒一人一人が自己理解や他者理解を深め、自他の命の尊さや価値を再認識する必要がある。
・生徒の自己肯定感を高めていく必要がある。

本校の取組の特徴
1　外部講師を招いた講話による「命」の大切さの再認識、自己理解及び他者理解の深化
2　スクールカウンセラーの個別カウンセリングの実施による、きめ細かな生徒理解

取組の内容

○　自殺予防教育の取組

1　外部講師を招いた講話による「命」の大切さの再認識及び、自己理解及び他者理解の深化

講演「命の大切さ」　講師：助産師：吉田　征子　氏

【内容】
助産師の経験や体験に基づいた講話を通して、自他の生命の大切さについて理解を深めるとともに、規範意識の向上を図る。

【生徒の感想】
・自分も含めて小さな頃から大切な一人の人間として接することの大切さを実感した。
・命の大切さについてこれまであまり考えたことがなかったが、命がどれだけ大切かを実感できた。
・自分の命はもちろん、他者の命も大切に考えなければならないと思った。
・犯罪に関わることが、自分だけでなく周囲にも命に関わる重大なことが起こる可能性があるとことを再認識した。

【講演「命の大切さ」の様子】

2　スクールカウンセラーの個別カウンセリングの実施による、きめ細かな生徒理解

スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの機会を充実させ、生徒が抱える悩みに対してきめ細かな対応を行い、教職員の生徒理解の深化に努めた。

※　アセスメントツールの結果及び分析等の活用
「心と身体のチェック」の結果や分析結果を踏まえ、個別面談時に一人一人の困り感や悩みに触れ、必要に応じて医療機関等、専門機関とつなげることができた。

取組の成果等

○　成果
生徒が、様々な場面において「命の大切さ」について考えることにより、自他の「命を大切にする」意識を向上させることができた。

○　課題
抽象的な事象や概念に係る説明が多く、日常の行動と結びつけて考えることが難しい生徒がいたため、生徒一人一人が身近な事象として認識し、日常の行動へつなげられるよう取組の内容を充実させる必要がある。

○　次年度に向けて
生徒の現状を見極め、生徒及び学校の実態に合った内容・講師等について検討を行うとともに、講話への保護者の参加について検討を行う。

令和４年度高校生ステップアップ・プログラム

北海道江別高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科・事務情報科・生活デザイン科
生徒数：775 名

本校の目指す生徒像
自他を尊重し人間力を高め、課題解決に向けた行動力と想像力を培う。

本校の現状
対人関係において、周囲への配慮から自己開示することに消極的な生徒が見られる。

本校の取組の特徴
1　ピア・サポート研修会の実施
2　保健講話の実施

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組
（スクールカウンセラーによる支援）

1　ピア・サポート研修会の実施
・ね　ら　い：他者理解や人間関係形成能力の育成
・テ　ー　マ：「相談すること」
・実 施 内 容：生徒会保健局を中心とした他者への自己開示を意識するアサーショントレーニングを実施し、具体的な場面を設定した上で、相手がどのように受け止めるかを想像しながら、自分の気持ちをきちんと伝えるための言葉を考える。
・生徒の感想：「理由や根拠を通して自分の意見を言う必要を理解した」「相手のことを考えながら自分の気持ちを言うのは難しいが、そういう話し方ができるようになりたい」　等

2　保健講話の実施（１学年を対象に実施）
・思春期特有の心理的特徴を知り、様々な葛藤に悩むことは当然あり得ることを学んだ。
・心身の変化に対する手立てとして、ストレスマネジメント、コミュニケーションスキル及びソーシャルスキル等について学んだ。
・生徒の感想：「不安に感じるのは自分だけではないと知り安心した」「ストレスを感じたとき、深呼吸するだけで気持ちが落ち着くことを改めて感じたので、取り入れていきたい」

※　アセスメントツールの結果及び分析等の活用
「ほっと」や「心と身体のチェック」の結果を各学年で分析し、ストレスや不安を抱えている生徒に個人面談を行う際に活用した。

取組の成果等

○　成果
ピア・サポート研修会の実施により、生徒のコミュニケーションスキルが向上するとともに、他者理解をしようとする態度の育成や、自他を尊重する内的な変化を実感する生徒が増えた。

○　課題
全校生徒を対象とした取組までには至らなかったため、関係分掌等と連携の上、校内における調整を図る必要がある。

○　次年度に向けて
ピア・サポート研修会を定期的に受講した生徒がピア・サポーターとなり、それまでに養った人間関係形成能力や他者理解力をさらに深め、学級や学年等の単位で継続的に展開する。
心理学に関心のある生徒や進路内定後の第３学年を対象に、ピア・サポート研修会への参加を促し、研修内容のさらなる共有と還元に努める。

北海道札幌北高等学校

課　程：定時制
学　科：普通科
生徒数：104 名

本校の目指す生徒像

・広く学び、深く考え、自ら行動することができる生徒
・人を人として尊重し、豊かな心を持った生徒
・前を向き、挑戦し、未来を切り拓くことができる生徒

本校の現状

・コミュニケーション能力と社会性の育成が必要
・心の健康教育の充実に向けた校内環境の整備が必要
・特別支援教育に関する教職員のスキルアップが必要

本校の取組の特徴

1　自殺予防教育プログラム等の活用
2　個別のカウンセリング
3　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施

取組の内容

○　スクールカウンセラーによる支援

1　自殺予防教育プログラム等の活用

自殺予防教育プログラム等の活用により、１学年の生徒を対象にスクールカウンセラーによる心の授業を実施し、良好なコミュニケーションの取り方や自殺予防の対応方法について学びを深めた。

良好なコミュニケーションの取り方については、生徒がロールプレイを体験し、良い人間関係を作るコツを学んだ。また、自殺予防の対応方法については、スクールカウンセラーの講話により、生徒が自殺のきっかけや原因を学び、自他の命を守るためにできることを考えるきっかけとなった。

2　個別のカウンセリング

４月から、生徒及び保護者を対象とした個別のカウンセリングを実施した。また必要に応じてケース会議やコンサルテーションを実施した。

3　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施

分析結果を特別支援委員会で分析し、要支援の生徒に対して担任による面談を実施した。また、必要に応じて継続的な面談や特別支援委員会による面談も実施した。

取組の成果等

○　成果

４月の早い段階で、１学年に対しスクールカウンセラーの紹介と講話を行い、７月と９月にスクールカウンセラーによる「心の授業」を実施することにより、様々な相談ができる大人の一人として、本校にもスクールカウンセラーがいることを理解させることができた。また、何かあればいつでも相談できる場所として環境を整備することができた。

○　課題

教職員における特別支援教育への理解及び合理的配慮の実践に課題が見られるため、スキルアップを図るための研修を実施する必要である。

○　次年度に向けて

本年度実施した取組を継続し、教職員のスキルアップを図るとともに、入学時の予防教育に重点を置き、１学年を中心にスクールカウンセラーを活用した講話や担任による面談を計画的に実施する。

北海道札幌琴似工業高等学校

課　程：定時制
学　科：工業科
生徒数：78 名

本校の目指す生徒像

周囲と良好なコミュニケーションをとる方法を身につけ、自身の自己肯定感の向上を図り社会の変化に対応できる生徒

本校の現状

自己肯定感が低く、他者とのコミュニケーションが苦手な生徒が見られる。

本校の取組の特徴

１．集団カウンセリングや自殺予防プログラムの活用
２．実際にグループワーク等を取り入れながら、自身のコミュニケーションスキルの向上
３．自殺予防をテーマとした、ストレス耐性の向上や援助希求的態度の育成

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

１　集団カウンセリングや自殺予防教育プログラムの活用

１年生を対象にスクールカウンセラーによる「こころの授業」を実施し、良好なコミュニケーションの取り方について学びを深めた。

２　実際にグループワーク等を取り入れながら、自身のコミュニケーションスキルの向上

スクールカウンセラーの体験を基に、自殺する人の心理状況について講義を行った。その後、生徒に対して、自分や自分の周囲に自殺しようとする人がいた場合、どのようにコミュニケーションを取ることで助けることができるか、また、グループワークを行い、ストレスの軽減等について考えを深めた。

３　自殺予防をテーマとした、ストレス耐性の向上や援助希求的態度の育成

スクールカウンセラーによるストレス耐性の向上の授業や、２年生以上を対象に高大連携による自殺予防プログラムを実施し、どのように周囲に援助希求的な行動に繋げていくかについて、グループワークを通して理解を深めた。

※　アセスメントツールの結果及び分析等を活用

定期的に「ほっと」、「心と身体のチェック」を実施して、生徒の心の状態を確認し、生徒の心理状況の可視化を行い、さらに「hyper-QU」の診断結果と合わせて担任と生徒と面談を行いながら、生徒一人一人に寄り添った指導を行うことができた。

取組の成果等

○　成果

・「ほっと」「hyperQ-U」、「心と身体のチェック」を実施したことにより、生徒の実態把握を行うことができた。
・スクールカウンセラーによる集団カウンセリング等を実施したことにより、生徒は他者との円滑なコミュニケーションの取り方や人間関係構築について具体的な学びを深めることができた。
・「自殺予防教育プログラム」を実施したことにより、生徒は周囲への助けの求め方やコミュニケーションの取り方を工夫することで、ストレスが軽減できることを学んだ。

○　課題

生徒の実態把握を行う検査において、同時期に複数の検査を行うことになってしまったため、検査時期等を検討する必要である。

○　次年度に向けて

生徒の実態把握するための時期を考慮した上で検査時期を設定するとともに、実施内容については、生徒に概ね好評だったため、今後も本取組を継続できるようスクールカウンセラーを中心に、外部機関等と連携し内容の充実を図りたい。

北海道有朋高等学校

課　程：定時制
学　科：普通科・事務情報科
生徒数：226 名

本校の目指す生徒像
・自ら伸ばせ　輝かせ
・心豊かに　気品あれ
・進取で強く　しなやかに

本校の現状
多くの悩みを抱え、不登校傾向のある生徒に対して、校内委員会と各年次がスクールカウンセラーと連携しながら支援に努めている。

本校の取組の特徴
1　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実
2　外部専門家の積極的な活用
3　北海道医療大学生によるピア・サポート活動及び学習支援

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実
・生徒のみならず、保護者や関係教員を対象としたカウンセリングを実施した。
・教職員全体の相談体制強化と生徒理解スキルの向上を目的に、スクールカウンセラーによる教職員を対象とした校内研修会を実施した。

2　外部専門家の積極的な活用
・外部専門家による授業参観や担任団との情報交換を通して、課題を抱える生徒に対する指導について指導や助言を受けた。

3　北海道医療大学生によるピア・サポート活動及び学習支援
・大学生によるピア・サポート活動を年間５回実施し、講話、面談、授業参観などを通して好ましい人間関係を構築する力やコミュニケーションスキルの向上を図った。

※　アセスメントツール「心と身体のチェック」の実施と活用
・「心と身体のチェック」を年３回実施し、ストレスや不安を抱えている生徒をリストアップして、担任による個別面談を実施した。

取組の成果等

○　成果
・スクールカウンセラーによる個別カウンセリングを実施したことにより、適切な支援を受け、学校生活をより一層意欲的に送ることができるようになり、中途退学者の減少につながった。
・専門家からの助言を受け、教職員全体で助言の内容に係る情報共有を行ったことにより、生徒に寄り添った指導の徹底及び相談体制の強化が図られ、生徒が積極的に相談する場面が増えた。

○　課題
・多様な課題を抱えた生徒が多数在籍している中で、相談を希望する全ての生徒及び保護者へ対応するため、十分な時間を確保する必要がある。
・５月の連休明けから、登校が不安定になる生徒が増加する傾向があるため、年度始めの早い段階での手厚い支援体制を構築する必要がある。

○　次年度に向けて
・生徒及び保護者への対応の時間を確保するとともに、専門家による校内研修会を定期的に開催し、さらなる生徒理解のスキル向上に努める。
・年度始めの早い時期において、アセスメントツール「心と身体のチェック」や「ほっとプラス」などの分析結果を教職員全体で共有し、生徒のよりよい人間関係の構築に向けた取組を軸に、組織的な生徒支援の充実を図る。

北海道倶知安農業高等学校

課　程：全日制
学　科：生産科学科
生徒数：５５名

本校の目指す生徒像

・自立・共生の心を持ち、明朗で優しく、思いやりのある人
・挑戦する心を持ち、生涯にわたり学び続ける人
・郷土を愛し、農業や地域産業の振興・発展に貢献できる人

本校の現状

人間関係を構築することが苦手な生徒や、自他の「心の危機に気付く力」と「相談する力」を身に付ける必要がある生徒が見られる。

本校の取組の特徴

1　スクールカウンセラーによる自殺予防講話の実施
2　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの実施
3　家庭科と保健体育科や思春期教室（全学年実施）が連携した“命の大切さ”を伝える学習の実施

取組の内容

○　自殺予防教育の取組、スクールカウンセラーによる支援

1　スクールカウンセラーによる自殺予防講話の実施

『いのちとこころを考える』というテーマで１年生を対象に２回（１回目：２月 21 日、２回目：２月 24 日）に実施。実施内容は、

・自殺の要因、現在の子どもたちの状況（講義）
・実際の事例を基に、個人及びグループで考え発表し合う（ディスカッション）
・自分の心の状態を把握する（実態把握）
・コミュニケーションや会話の必要性を体感するゲーム（交流と協力）

である。

援助希求能力（援助希求的態度）の育成や SOS を出すことは悪いことではないということ、“傾聴”する姿勢が大切であるということを学び、傾聴に関しては他の話合い活動でも聞く姿勢が良くなったという効果を得ることができた。

【「傾聴」をペアワークで体験】

2　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの実施

担当者やＨＲ担任がスクールカウンセラーとの情報共有を行い、スクールカウンセラーに助言をいただきながら、生徒の抱える課題に対処した。

3　家庭科と保健体育科や思春期教室（全学年実施）が連携した“命の大切さ”を伝える学習の実施

家庭科では生命の誕生に触れて“命の大切さ”を取り扱い、保健体育科では精神疾患に関する単元で「ストレスの対処」や「自殺予防」について取り扱うなど、教科横断的に実施した。家庭科と保健体育科における学習により、広く「生命」や「心の健康」などに関する学びを通じて、「核となる授業」に取り組む下地をつくった。さらに各学年で「思春期教室」を実施し、命の大切さやライフプランなどについて講話を実施した。

※　「ほっと」または「心と身体のチェック」の結果及び分析等の活用

アセスメントツール実施後、色分けされた表を見て、否定的な回答の多い生徒を把握できることから、リスクのありそうな生徒に対して、教育相談を実施したり、教育相談の結果を踏まえ、当該生徒の保護者と懇談をしたりすることができた。また、リスクのありそうな生徒については、全教職員で情報を共有するとともに、日常的に観察したり、声かけを行ったりするなど、適切にフォローアップすることができた。

取組の成果等

○　成果

・スクールカウンセラーによる講話を行ったことにより、生徒のカウンセリングへの抵抗がなくなり、教育相談の充実を図ることができた。
・家庭科と保健体育科、養護教諭が連携し、“命の大切さ”を各分野で伝えることにより、生徒一人一人が“命の大切さ”についての理解を深めることができた。

○　課題

・スクールカウンセラーとのカウンセリングの時間を十分に確保できなかったことから、日程調整等、相談しやすい環境づくりに向けて生徒への配慮が必要である。

○　次年度に向けて

・スクールカウンセラーに放課後の時間に来校していただくよう日程を調整する。

令和４年度高校生ステップアップ・プログラム

北海道白老東高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：１５３名

本校の目指す生徒像
・主体的に取り組むことができる生徒
・多様な人々を尊重し、自他の生命尊重ができる生徒
・協働して様々な課題を解決できる生徒

本校の現状
・他を尊重し、友好的な交友関係を構築する力の育成が必要である。
・ストレスへの対処方法を身につける力が必要である。

本校の取組の特徴
1　自殺予防に関する正しい知識や援助希求的態度についての理解の深化
2　ピアサポート活動やアサーショントレーニングを通して、生徒のコミュニケーション能力の向上
3　教職員の教育相談能力の向上と教育相談体制の充実

取組の内容

○　スクールカウンセラーによる支援

1　自殺予防に関する正しい知識や援助希求的態度についての理解の深化

全学年を対象に、スクールカウンセラーによる「いのちを守る教育講座」を実施することで、援助希求的行動の理解が深まり、同時に援助行動ができるようになりたいと考える生徒が増加した。

2　ピアサポート活動やアサーショントレーニングを通して、生徒のコミュニケーション能力の向上（※全学年で構成的グループエンカウンターを実施）

(1) 全学年を対象に、スクールカウンセラーによる「いのちを守る教育講座」を実施した。
(2) １年生を対象に、「話し方講座」を実施した。
(3) ２年生を対象に、「こころの回復力をつけよう講座」を実施した。
(4) ３学年を対象に、「コミュニケーションと性的同意講座」を実施した。

3　教職員の教育相談能力の向上と教育相談体制の充実

(1) 定期来校時における生徒の個別カウンセリングを実施した。
(2) 自殺予防やストレスへの対処法についての集団カウンセリングを実施した。

※　「ほっと」及び「心と身体のチェック」の活用

「ほっと」及び「心と身体のチェック」の結果を分析することで、困り感を持つ生徒の把握につながり、カウンセリングを実施できた。また、各クラス担任がより深く個人個人を理解し、面談等で大いに活用できた。

取組の成果等

○　成果

・スクールカウンセラーや本校教職員による、生徒への集団カウンセリングや、各種講座を実施したことにより、自己の悩みを他者に打ち明けることができる生徒が増加するとともに、他者の悩みを受け取って、悩みを共有し、他の大人につなぐなど、助けになりたいと感じる生徒が増加した。

○　課題

・自己肯定感の低い生徒や、自分と異なる考えや行動をとる生徒が多いため、今後も継続した構成的グループエンカウンターやアサーショントレーニングを実施する必要がある。

○　次年度に向けて

・今後も継続的に、集団形成プログラム、自殺予防の講座を実施する。
・スクールカウンセラーの個別カウンセリングを適宜実施する。
・いじめや不登校の早期発見・早期対応ができるよう、教職員の研修を充実させる。

北海道鵡川高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：137 名

本校の目指す生徒像

一人ひとりの個性を伸ばし、明るく豊かでたくましい人間を育成する。

本校の現状

近年は特に「対人関係が苦手」「精神的に不安定」等、学校生活に不安を抱え、支援やサポートが必要な生徒が見られる。

本校の取組の特徴

１　「コミュニケーションスキルアップトレーニング（ＣＳＴ）」の実施
２　教育相談活動の充実

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

１　「コミュニケーションスキルアップトレーニング（ＣＳＴ）」の実施

生徒サポート委員会を中心に、コミュニケーションスキル向上のためのトレーニングや人間関係づくりを支援する集団カウンセリング、外部講師による講演や授業などの取組を継続的に実施。

・８月に、１・２年生は人間関係づくり、３年生はコミュニケーションの活用（自己主張）といった内容の自殺予防に係るＣＳＴを実施した。
・11 月及び 12 月に、不登校などの未然防止や自分の感情や考えを表現したり、他者の感情や考えを受け入れたりすることをねらいとした「絵本セラピー」を実施した。

２　教育相談活動の充実

教育相談担当教員が中心となり、スクールカウンセラーによる個別カウンセリング、担任や学年団、養護教諭による日常的な面談、全校生徒対象の教育相談を実施。

・毎月１回、スクールカウンセラーによる個別の教育相談を実施した。（１月 19 日現在で、生徒はのべ 44 名、保護者はのべ２名が教育相談を受けた。）
・４月、１年生を対象に、クラスの集団づくりをねらいとした人間関係づくりや集団カウンセリングなどを実施した。
・８月、１年生は「傾聴」、２年生は「アサーティブな考え方」、３年生は「自己主張」をテーマにＣＳＴを実施した。
・９月及び 12 月、教職員向けに、「hyper-ＱＵの分析」をテーマに校内研修を実施した。その中でケース会議を行い、その後の生徒理解や生徒との関わり方に活用した。

※　生徒の状況調査

・「ほっと」、「ほっとプラス」、「心と身体のチェックリスト」、「hyper-ＱＵ」を実施した。
実施後は、主に「ほっと」「hyper-ＱＵ」のデータをもとに、スクールカウンセラーから各クラスの状態や、要支援生徒について講演をいただき、その後、教職員研修として職員でケース会議を行い情報の共有を図った。後日、学年団で個別に面談等を行い生徒の状況を確認し、今後の継続的な指導につなげた。

取組の成果等

○　成果

・授業内容の改善等を行ったことにより、コミュニケーションについての意識が変化する生徒が増えた。
・スクールカウンセラーの授業や教員向けの研修を実施したことにより、教員の理解が深まった。

○　課題

生徒の精神的な未成熟や発達上の特性等が要因と考えられる人間関係のトラブルがあるため、今後、担任や教科担任、部活動顧問だけではなく、スクールカウンセラーや外部機関と連携し、組織的に対応することが必要である。

○　次年度に向けて

生徒の心のケア等に関する校内研修を実施し、アンケートのデータを教職員間で実施時期ごとに比較・共有し、組織的に対応するとともに、クラスや部活動等の集団における個々の生徒への理解に生かす。

北海道追分高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：62 名

本校の目指す生徒像
・主体的・協働的に学習に向かう生徒
・自律的に行動し、実践力のある生徒
・豊かな感性を持ち、他者に寛容な生徒
・相手の意見を尊重し、自分の意志を表現できる生徒

本校の現状
生徒の自己肯定感の向上及びコミュニケーション力を育成するための継続的な取組が必要である。

本校の取組の特徴
1　生徒サポート委員会を中心に、個々の生徒に対応した支援の充実
2　教科指導による、発表力及びコミュニケーション能力の育成（異年齢交流やボランティア活動）
3　自殺予防教育プログラムの実施による、援助希求的態度及びストレスに対処する力の育成

取組の内容

○　スクールカウンセラーによる支援

【集団カウンセリングによるワークショップ】

1　生徒サポート委員会を中心に、個々の生徒に対応した支援の充実
スクールカウンセラーの助言をもらい、継続して面談を実施していく中で、気持ちの整理の仕方や出来事への対応など、援助希求能力や自己決定力を育成し、卒業へとつなげた。（面談延べ人数 26 名）

2　教科指導による、発表力及びコミュニケーション能力の育成（異年齢交流やボランティア活動）
３年選択授業では、学習成果発表会において、熱気球やピタゴラスイッチ、ピアノ演奏、手話を使った歌の発表等、研究テーマに沿った発表を工夫し保護者や全校生徒の前で発表。ボランティアではノーザンホースパークマラソンのボランティアとして 14 名が参加。給水や走路の補助を行った。ランナーからの「ありがとう」の言葉に生徒も笑顔になっていた。

3　自殺予防教育プログラムの実施による、援助希求的態度及びストレスに対処する力の育成
・１学年は「ストレスを知ろう」「コミュニケーションを大切に～チーム体験を味わおう」
・２学年は「自分と相手を大切にするコミュニケーション」「チーム体験を味わおう」
・３学年は「知っておこう青年期のこころ」　をテーマに、集団カウンセリングを実施した。

「生徒の感想」
＜１年生＞「ストレスを感じている時は、一人で抱え込まないで誰かに相談すべきだと思った。」
＜２年生＞「コミュニケーションの仕方によって、人間関係も変わると実感した。」
＜３年生＞「青年期について知ることができて、どの位ストレスが溜まっているのか知ることができて良かった。」

※　「ほっと」「心と身体のチェック」結果の活用
結果で落ち込みのある項目や生徒に着目、１年生は進路意識の向上、２年生は学級作りを意識した支援を行った。

取組の成果等

○　成果
チーム体験を味わうワークショップを取り入れることにより、生徒は、「話を聞くこと」、「自分の意見を言うこと」、「チームの意見をまとめること」の難しさと楽しさを体験することができた。
その結果「ほっと」では、１年生は「仲間強化」「自己統制」「援助要請」の３因子、３年生は「関係維持」「仲間強化」「自己統制」「援助要請」の４因子に上昇が見られた。

○　課題
２年生は、「ほっと」の結果で各因子の上昇があまり見られなかったため、スクールカウンセラーによる支援を継続し、クラスメイトと協力する楽しさを体験する機会や、ソーシャルスキルトレーニング等の機会を、授業やホームルーム活動に多く取り入れ、上昇を図る必要がある。

○　次年度に向けて
スクールカウンセラーによる支援や、自殺予防教育プログラムを継続する。１年生に、生徒理解のための情報収集を早期に行い、個々の支援と居心地の良い集団づくりに力を入れる。２・３年生は、４因子をさらに上昇させる。

北海道平取高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：44 名

本校の目指す生徒像
・自己実現に向けて意欲的に活動し挑戦し続ける生徒
・健やかな心身を持ち互いに認め合う生徒
・郷土愛と国際感覚を身に付け地域に貢献できる生徒

本校の現状
地元から入学する生徒が多く、人間関係に大きな変化がない中で、他者とのコミュニケーションに悩みを抱える生徒が見られる。

本校の取組の特徴
1　子ども理解支援ツール等の分析結果を活用した、カウンセリング及び教育相談体制の充実
2　柔軟な理解力、援助希求的態度、適切な表現力の育成

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　子ども理解支援ツール等の分析結果を活用した、カウンセリング及び教育相談体制の充実

・「ほっと」や「ほっとプラス」の分析結果を全教員で共有し、生徒との面談を行うなど、生徒理解の深化に努めた。

・５月及び 10 月に、全教員による全校生徒を対象とした教育相談「話そう週間」を実施し、定期的にスクールカウンセラーと情報共有を行った。また、９月に町の発達支援センター職員、保健師、相談支援所職員及び本校教員による関係機関との「情報交換ミーティング」を行い、特別な支援を要する生徒の情報を共有するなど、生徒が校内外で安心して相談できる、教育相談体制の構築に努めた。

【ソーシャルスキルトレーニングの様子】

2　柔軟な理解力、援助希求的態度、適切な表現力の育成

・11 月に、スクールカウンセラーによる全校生徒及び教職員を対象としたソーシャルスキルトレーニングを実施した。「自分も相手も大切にしながら、自分の気持ちを伝える手法」を習得し、良好な対人関係を築くためのスキルとして「DESC 法」を用いた実践に取り組んだ。

＜実施後の生徒の感想＞
・「自分の思いを伝えることができないという悩みを解決できたような気がして、とても嬉しかった」
・「たくさんの人と色んなバージョンで話せてすごく楽しかった」

【集団カウンセリングの様子】

取組の成果等

○　成果

・本事業の取組により、６月及び 10 月に実施した「ほっとプラス」では、全学年で「楽観的に考え直す力」「失敗を見つめ直す力」及び「考え直す力」の３項目において、２回目（10 月）の得点が、１回目（６月）よりも高まった。
・ソーシャルスキルトレーニングを実施することにより、生徒が主体的、意欲的に人間関係づくりに取り組む態度を育成することができた。

○　課題

10 月に実施した「ほっとプラス」の２回目調査で、第２学年において１回目よりも得点が下がったため、「将来に目を向ける力」及び「自分に置き換える力」を高めるための指導内容や方法について検討するとともに、改善に向け、組織的に取組を推進する必要がある。

○　次年度に向けて

引き続き、子ども理解支援ツールを活用し、全教員で生徒理解の深化に努めるとともに、スクールカウンセラーや町の関係機関と連携し、学校全体で、カウンセリング及び教育相談体制の充実に努める。

北海道松前高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：55 名

本校の目指す生徒像

1　自ら学び自ら考え積極的に行動する人
2　規律を守り心身ともにたくましい人
3　他を思いやり郷土愛と広い視野を持つ人

本校の現状

・昨年度の相談内容の多くがクラス内での人間関係に関する悩みだった。
・自己表現が苦手、または自己肯定感の低い生徒が見られる。

本校の取組の特徴

1　スクールカウンセラーを活用した生徒の人間関係形成能力の育成
2　年２回の教育相談週間の充実
3　月１回程度発行している教育相談通信の充実

取組の内容

○　自殺予防教育の取組

１　スクールカウンセラーを活用した生徒の人間関係形成能力の育成

自らの心の危機に対して早期に問題を認識し、心身が不調な時の対応やストレスに対処する能力を育むことを目指し、１・２年生を対象にスクールカウンセラーによる心理学講話を行った。

１年生：将来に向けた自己分析講座（エゴグラム）
・エゴグラムの実施、結果の振り返り
・結果から考える具体的な行動目標

２年生：思春期～青年期前期における心の健康講座
・高校時代の変化と悩み、乗り越えるための手段
・20 答法「私は誰？（Who am I ?)」
・「現実自己」と「理想自己」

【授業の様子：グループワーク及びペアワーク】

２　年２回の教育相談週間の充実

相手に何かを頼む・相談することの必要性や、自分の言葉遣いや話し方が相手に与える影響に気づき、相手とのよりよいコミュニケーションを実践することができることを目指し、ＨＲ活動（全学年一斉指導）において、２回に分けて養護教諭による心に関する授業を行った。

１回目：「頼みごとをするスキルを育てよう」
２回目：「より良い言葉のかけ方・聴き方」を考えよう

３　月１回程度発行している教育相談通信の充実

ストレス対処能力の育成を目指し、教育相談通信で心のケアやストレスへの対処等について複数回取り上げて啓発を行った。

※　「心と身体のチェック」から読み取れる生徒の変容を教職員で共有し、長期休業明けの教育相談週間の参考資料とした。

取組の成果等

○　成果

自殺予防教育プログラムやスクールカウンセラーによる心理学講話等により、「心と身体のチェック」の結果から、相談できる相手や悩みを話せる友人に関する項目に否定的な回答が減少するとともに、「hyper-QU」の結果から、ソーシャルスキルの改善がみられた。

また、冬季休業明けに実施した１年を振り返るアンケートの結果から、約４割の生徒に、心に関する授業を実施したことにより、「色々な先生と相談しやすくなった。」「いつも相談しなかった自分が友達によく相談できるようになった。」など、相手とより良いコミュニケーションを実践することに成果がみられた。

○　課題

「心と身体のチェック」の結果から、年間を通して「心配や不安」、「身体の不調」に関する設問において高い数値を示す傾向が見られ、学年によっては約半数が中等度以上のストレスを抱えていることに課題がみられたため、生徒の援助希求的態度の育成に継続して取り組む必要がある。

○　次年度に向けて

「心と身体のチェック」で高い数値が出ている「心配や不安」、「身体の不調」への対応に重点を置いた活動に取り組む。

北海道函館商業高等学校

課　程：定時制
学　科：事務情報科
生徒数：49 名

本校の目指す生徒像

1　高校生活に明確な目標を持ち、それに向けて学習や資格取得に熱心に努力し学校生活を大切にする生徒
2　郷土の歴史等に興味・関心があり、将来は地元産業への貢献を目指す意欲的な生徒

本校の現状

・温和で素直な生徒も見られるが、人間関係で不安を抱えている生徒も見られ、コミュニケーション能力の育成が課題である。
・基本的生活習慣が身に付いていない生徒が見られる。

本校の取組の特徴

1　スクールカウンセラーによる心の教育、集団カウンセリング授業（１年生～３年生）を実施し、人間関係の形成とコミュニケーション能力の育成
2　学校環境適応感尺度「アセス」を踏まえた個々の生徒の状況把握と、長期休業明けの全教職員による年２回の教育相談の実施

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　スクールカウンセラーによる心の教育、集団カウンセリング授業（１年生～３年生）を実施し、人間関係の形成とコミュニケーション能力の育成

(1) 対　　象：１年生、２年生　講師：北海道教育大学函館校准教授　本田　真大　氏
(2) 活動内容：以下の表のとおり。３～４人グループで活動する。
(3) 感染対策：グループの配置は、間隔を空けた弓なりの形態とした。道具などを共有した活動の後は、手洗いや道具などの消毒を行った。

実施日	活動内容	ねらい
８月 22 日（２年）	共感スキル（ちぎり絵）	相手のことを理解しようとする
８月 29 日（１年）	あたたかい言葉かけスキル（間違い探し）	自分にない発想に気づく
10 月 17 日（１年）	主体性スキルトレーニング（相手の意見を尊重しながら自分の意見を伝える活動　）	相手の意見を尊重し、自分の意見を伝える。
10 月 24 日（２年）	問題解決スキル（漢字探し）	相談しやすい人間関係

2　学校環境適応感尺度「アセス」を踏まえた個々の生徒の状況把握と、長期休業明けの全教職員による年２回の教育相談の実施

全校生徒を対象に、学習や進路、対人関係などに関する不安等を把握するための教育相談を実施し、教育相談の内容について、全教員で情報共有を図った。また、「アセス」を実施し、個々の特性を踏まえた深い生徒理解につなげることができた。

※　「心と身体のチェック」から読み取れる生徒の変容を教職員で共有し、生徒理解や教育相談の参考資料とした。

取組の成果等

○　成果

集団カウンセリングの授業では、参加者全員が班の中で、楽しくコミュニケーションを取りながら課題に取り組み、普段の授業では見られない生徒の一面を見ることができた。授業を継続することにより、生徒の人間関係の形成やコミュニケーション能力の育成につながることに成果が見られた。

○　課題

基本的生活習慣や人間関係など学校生活に不安を抱える多くの生徒のために、今後、更に人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るため、全教員が連携し、研修プログラムを複数回実施する必要がある。

○　次年度に向けて

集団カウンセリングの授業については、普段はあまり発言しないような生徒が積極的に他の生徒と会話している姿が見られ、その後のグループ学習では、お互いが積極的かつ共感できるような会話も見られた。次年度も、生徒の人間関係の形成やコミュニケーション能力の育成を図る取組として継続する。

「アセス」について、校内研修を実施し、生徒のデータの変化の見取り方や学校生活にどのように活用できるかなどを教職員間で研修し、生徒理解に努める。

北海道上ノ国高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：44 名

本校の目指す生徒像

豊かな人間性、他者への思いやり、自他の生命を尊重する気持ちを持つ生徒

本校の現状

高校入学までに、不登校などを経験した生徒が見られることから、予防的な教育相談活動の充実に努めている。

本校の取組の特徴

1　上高・ステップアッププログラムの実施

2　いじめ根絶討論会の実施

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　上高・ステップアッププログラム（全校生徒を対象）

４月末に、生徒指導部長が進行役となり、２時間のコミュニケーション活動を実施。全校を７班（縦割り）に分け３年生がリーダー役を務める。

リーダー役を中心に全校生徒で交流し、一人ひとりの良さを認め合い、互いの力を発揮し合えるような雰囲気づくりに努めた。

【上高・ステップアッププログラムの様子】

各学年役割

〈１年〉上級生とのコミュニケーションを取り、自分の意見を言えるようにする。
〈２年〉サブリーダーとして意見を吸い上げ、リーダーの補助的役割を果たす。
〈３年〉リーダーシップを取り、まとめながら下級生をサポートする。

2　いじめ根絶討論会の実施（全校生徒を対象）

12 月に生徒会の企画運営で、「いじめは絶対に許されない」ことを共通認識するために、２時間の討論会を実施した。全校を７班（縦割り）に分け、２年生がリーダー役を務める。

いじめをテーマに、縦割り班で話し合うことで、いじめは絶対に許されないことと確認する。当たり前のことではあるが、全校生徒で確認することで、過ごしやすい学校環境をつくる一助となっている。

※　「ほっと」・「心と身体のチェック」の活用

1　「ほっと」実施（全校生徒対象　５月・11 月）
教育相談面談前に実施し、面談前の基礎情報とした。

2　「心と身体のチェック」実施（全校生徒対象　夏季休業前　夏季休業後　冬季休業後）
長期休業前後における教育相談面談の基礎情報とした。

取組の成果等

○　成果

「人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組」、「自殺予防教育の取組」（「ほっと」・「心と身体のチェック」）、「スクールカウンセラーによる支援」など、それぞれの取組を１年の流れの中でつながりをもって実施することにより、各活動が充実した。

○　課題

各活動をつながりのある活動とするため、活動実施後の反省を分析し、教職員が計画的に活動を実施するシステムを構築する必要がある。

○　次年度に向けて

教育相談活動として、本プログラムの年間計画を具体化して教職員全体で共有することで、つながりを意識した活動の実施を目指す。

令和４年度高校生ステップアップ・プログラム

北海道鷹栖高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：　98 名

本校の目指す生徒像
・知識を知恵に変えることができる生徒
・思いやりの心にあふれ、自他を大切にできる生徒
・自ら学ぶ意欲を持ち変化に主体的に対応できる生徒
・郷土を愛し地域や社会に広く貢献できる生徒

本校の現状
・対人関係の構築や自己表現・コミュニケーションなどを苦手とする生徒が見られる。

本校の取組の特徴
1　相談しやすい人間関係の構築
2　ストレス対処能力とコミュニケーション能力の育成を図る取組
3　心の健康の育成に向けた取組
4　教職員のスキルアップの取組

取組の内容

○　自殺予防教育の取組
1　相談しやすい人間関係の構築
(1) ねらい　自他を大切にする言動や自己表現の方法を理解することで、生徒同士で相談しやすい人間関係を構築する方法を学ぶ。
(2) 内　容　「大切な人のゲートキーパーになるために」と題し、心の危機を脱出する方法等について、スクールカウンセラーによる講話を実施するとともに、集団・個別カウンセリングを実施した。
(3) 成　果　生徒が命の大切さを理解するとともに、援助希求的態度の重要性に気付くことができた。
2　ストレス対処能力とコミュニケーション能力の育成を図る取組
(1) ねらい　ストレスとの付き合い方を理解するとともに、コミュニケーション能力の向上を図る。
(2) 内　容　「ストレスと上手に付き合うために大切なこと」と題したスクールカウンセラーによる講話を実施するとともに、生徒同士のペアワークにより、ストレスの感じ方や対処方法について話し合いを行った。
(3) 成　果　生徒が自らの心の状態を把握する力に気付き、ストレスコーピングに対する理解を深めることができた。
3　心の健康育成に向けた取組
(1) ねらい　ゲームやインターネットなどの依存症の実態を知り、生徒が自らの課題を主体的に解決できるよう支援する。
(2) 内　容　「あなたのやりたいことは？～ゲーム・ネット依存について」と題したスクールカウンセラーの講話を実施するとともに、グループワークを通して、生徒が自らのゲームやインターネットの利用状況を確認し合い、望ましい利用方法について議論した。
(3) 成　果　生徒がゲーム依存からの脱却やネットモラルの習得により、生活リズムを整え、望ましい友人関係の構築に向けて、前向きに取り組むことができるようになった。
4　教職員のスキルアップの取組
(1) ねらい　特別な配慮を必要とする生徒への理解と合理的配慮の実践に向けて教職員のスキルアップを図る。
(2) 内　容　外部の専門家を招き、発達段階に応じた支援や関係機関との連携の在り方について講話を実施した。
(3) 成　果　教職員が関係機関との連携や合理的配慮の重要性について理解を深めた。

【スクールカウンセラーの講話の様子】

※「ほっと」及び「心と体のチェック」の活用
(1) 「ほっと」の結果について、教職員間で生徒一人一人の特徴及び学級全体の状況を共有し、生徒に対する支援の方針を決定する際の資料として活用した。
(2) 「心と体のチェック」の結果について、臨床心理士等の外部専門家から助言を仰ぐ際の客観的な資料として活用した。

取組の成果等

○　成果
・スクールカウンセラーの講話により、生徒の自他を尊重する気持ちやコミュニケーション能力、ストレス対処能力の育成を図ることができた。
・スクールカウンセラーによる集団・個別カウンセリングにより、生徒のストレスが軽減され、学校生活を前向きに送ろうとする意識が高まった。
・「ほっとプラス」の結果を分析することにより、積極思考をする生徒が増え、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図ることができた。

○　課題
・自己肯定感の低い生徒が見られたため、スクールカウンセラーを活用した教育相談の更なる充実を図る必要がある。

○　次年度に向けて
・教育相談委員会の機能を向上させて、生徒へのアセスメントによる個別支援計画の充実を図る。
・教職員の研修会を継続的に実施して、生徒理解を深めるとともに、組織的な支援体制の構築を図る。

北海道遠別農業高等学校

課　程：全日制
学　科：生産科学科
生徒数：53 名

本校の目指す生徒像
1　礼儀正しく、きまりを守る人
2　自ら学び、たくましく生きる人
3　豊かな心で、明るい郷土を拓く人

本校の現状
・コミュニケーションに苦手意識をもつ生徒が見られる。
・他者理解に困難が生じ、共感的な人間関係がとれないことによるトラブルが見られる。

本校の取組の特徴
1　スクールカウンセラーによる自他理解を深める講演の実施
2　「心と身体のチェック」の実施及び結果の分析

取組の内容

○　自殺予防教育の取組

1　スクールカウンセラーによる自他理解を深める講演の実施

他者の意見を取り入れることを苦手にしている生徒が多いことから、全学年を対象に「心の柔軟性の獲得」をテーマに、上手な気持ちの保ち方や自己の感情コントロールの方法について講演を実施した。生徒の感想には、「レジリエンスが高い人ほど、気持ちの切り替えができている人なので、自己の気付きや感情コントロールをもっと高めていきたいと思った。」等、学びの深まりが見られた。

【スクールカウンセラーによる講演の様子】

2　「心と身体のチェック」の実施及び結果の分析

生徒の心身の変化に対応するため、年３回「心と身体のチェック」を行い、分析した結果を教職員間で情報共有し、生徒理解を深めた。

取組の成果等

○　成果

・生徒自身がコミュニケーションスキルについて考える取組を継続的に実施したことにより、生徒の言葉の受け止め方にゆとりができ、授業や学校行事等で対話によるコミュニケーションを行う機会が増え、コミュニケーションに苦手意識をもつ生徒が減少した。
・生徒支援ツールの分析や共有した情報の活用方法等、教職員の教育相談のスキルが向上したことにより、多様な生徒に対する適切な支援を行うことができた。

○　課題

・生徒間のコミュニケーションにおいて、話の中心が自分自身になるため、他者への共感的な関わり方を育成する必要がある。
・生徒支援の取組が予防的な側面に偏っているため、開発的な取組を強化する必要がある。

○　次年度に向けて

・生徒支援の予防的な側面については一定の成果をあげることができたため、継続して生徒の実態に応じた開発的な生徒支援の取組を強化し、より一層のコミュニケーション能力の育成を図る。

北海道礼文高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：58 名

本校の目指す生徒像
・自ら学び、創造する生徒
・自ら考え、実践する生徒
・自ら鍛え、思いやりのある生徒

本校の現状
・各学年 20 名程度で、道外出身の生徒も多数在籍しているため、多様な価値観を認め合いながら安心して学ぶことができる環境の醸成が必要である。

本校の取組の特徴
1　生徒間のよりよい人間関係の形成を支援する「スキルアップトレーニング」の実施
2　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成

1　生徒間のよりよい人間関係の形成を支援する「スキルアップトレーニング」の実施

１学年の生徒 20 名を対象に、自己理解や他者理解を深めることにより、よりよい人間関係の構築に役立てることをねらいとし、４名程度のグループに分かれて、グループディスカッションを実施した。スクールカウンセラーが提示したテーマについて、各自が意見を出し合い、最後にグループで意見をまとめる過程で、他者の意見を尊重するとともに、自分の意見を他者にわかりやすく伝えるなどの演習を行った。

「Hyper－QU」等のアセスメント結果から、生徒の「集団への満足度」は総じて高いことが判明したが、「集団の中での承認」について低い値を示した生徒が見られたため、特別活動等において 自己決定を行う機会を増やし自己肯定感を高める取組を行った。

【グループディスカッションの様子】

2　スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実

スクールカウンセラーが６回来校し、対人関係などに関する不安をもつ生徒に対して教育相談を実施した。教育相談のまとめを全教職員で共有し、日常の声かけに活用した。

※　「心と身体のチェック」の結果を活用し、個人面談において個に応じた声かけを行った。

取組の成果等

○　成果
・「スキルアップトレーニング」を実施したことにより、他者との意見交換や他者への傾聴を通して良好な関係が構築され、より積極的に他者に関わろうとする姿勢が育成された。
・スクールカウンセラーによる専門的な立場からの助言や情報を踏まえ、個々の生徒の情報について、教員間で情報共有したことにより、生徒や保護者への適切な対応に結び付けることができた。

○　課題
・全国から生徒を募集し、多様な生徒集団の中で生活するため、生徒のコミュニケーション能力を一層向上させる取組を継続する必要がある。
・取組の効果について、教職員が生徒の変容を捉えるため、アセスメントツールの検証について一層理解を深める必要がある。

○　次年度に向けて
・スクールカウンセラーと一層連携や協力を深め、生徒に対して有効な支援と対策を学校全体で継続的に行う。
・生徒同士が助け合い、支え合う人間関係づくりを様々な方策で支援し、生徒のキャリア形成に役立つ取組を継続するほか、校内研修に努め、アセスメントツールの検証に関する校内研修を実施する。

北海道清里高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：88 名

本校の目指す生徒像

・郷土愛と国際性にあふれ社会貢献できる生徒
・自己実現に向け意欲的に挑戦し続ける生徒
・健やかな心身で互いに認め合い共に生きる生徒

本校の現状

・多くの生徒が素直で真面目に物事に取り組んでいる。
・他者と好ましい人間関係を築くことが苦手なため、不安や悩みを抱え込む生徒が見られる。

本校の取組の特徴

１　多様性を認め合う人権教育及びコミュニケーションスキル向上の取組の推進
　～集団カウンセリングの手法を用いたアサーショントレーニング、心理学の専門家による講演会
２　ＩＣＴを活用した他者とのつながりを促進する取組の推進
　～登校できない生徒へのオンライン授業配信や各授業における他者との交流を取り入れた授業の展開

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

１　多様性を認め合う人権教育及びコミュニケーションスキル向上の取組の推進

(1)　集団カウンセリング（コミュニケーションスキルトレーニング）
・対象学年：１学年３回、２学年３回、３学年２回
・内　　容：「他者との関わりについて」「社会人基礎力とコミュニケーション」「感情コントロール」等についてアサーショントレーニングやロールプレイを活用して実施

【集団ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞの様子】

(2) 専門家による講話（多様性を認め合う人権教育をテーマ）
・対象学年：全校生徒
・内　　容：「LGBT と性の多様性について」（９月９日実施）
助産院はる代表、看護学修士　深津　晴江　氏
「多様性を認め合い、人としての在り方生き方を学ぶについて」
（10 月 21 日実施）
酪農学園大学准教授　須賀　朋子　氏

【講話の様子】

２　ＩＣＴを活用した他者とのつながりを促進する取組の推進

(1) 登校できない生徒へのオンライン授業配信
(2) Jamboard を活用した他者意見の交流活動
(3) Google Meet を活用した小グループによる発表活動
(4) Zoom、Google Meet を活用した他校やニュージーランドの姉妹校とのオンライン交流活動

【Jamboard の活用】

【ｵﾝﾗｲﾝ交流活動】

取組の成果等

○　成果
・継続的なソーシャルスキルトレーニングや専門家による講演会により、相手の立場を尊重して対応する姿勢を身に付けることができた。
・ＩＣＴを活用した他者とのつながりを促進する活動により、他者との意見交換を段階的に取り組むことができた。

○　課題
・オンラインによる交流活動について体制を整備することはできたが、実際に生徒に投げかけたところ、オンラインよりも直接話をした方がよいという意見が多くあったため、対面での相談を維持しながら、必要に応じてオンライン相談も対応できる体制を維持していく必要がある。

○　次年度に向けて
・対面とオンラインでの教育相談体制を確保し、生徒の要望にあわせて対応する。
・意図的にコミュニケーションスキルトレーニングを取り入れ、好ましい人間関係づくりに取り組む。

北海道音更高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
生徒数：254 名

本校の目指す生徒像

「心豊かに生きる基礎を築くために」
・自ら学ぶ　・自ら行う　・自ら鍛える

本校の現状

生徒の人間関係を形成する力の不足や心の不安定さがあるため、適切なストレス対処や援助希求態度の育成を図る必要がある。

本校の取組の特徴

1　コミュニケーション能力の育成
2　自殺予防教育を活用したコミュニケーション育成のトレーニング

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1　コミュニケーション能力の育成

・１年次を対象に社会性と情動の学習（SEL）のワークを５月、６月、７月の３回（自分も他人も気持ちよく過ごそう、顔の見えないコミュニケーション等）を実施した。
・３年次を対象に価値観・多様性理解のグループワークを実施した。生徒からは「それぞれ違う考え方でどの意見も尊重すべきだと思った」「考えの違う人ともしっかりと話合うことが改めて大切なことだと思った」等の感想があった。

【グループワークの様子】

・ボランティア部を対象にピア・サポート研修を実施し、異年齢間での関係づくりを行った。

2　自殺予防教育を活用したコミュニケーション育成のトレーニング

・支え合うクラスづくりを目指し、１年次を対象に学校における自殺予防プログラム（GRIP）を用いた自殺予防教育を３時間実施した。自分の気持ちに気づくことや感情の整理、相談する場面をカードゲームやロールプレイを用いて体験した。自分の気持ちの伝え方や SOS を出すことの重要性と ECO の原則（engage：相手と向かい合う、choice：責任ある判断をする、open：大人に関係をひらく）についてグループワークを通して学んだ。
・１回目の「ほっと」の結果では、低群の「関係維持」のポイントが低かったため、教材やグループワークの方法を工夫して行ったところ、２回目の結果では低群の「関係維持」のポイントが上昇し高群との差も大幅に減少した。生徒からは「気持ちを伝えることがあまりできない自分にとって、とても為になる授業だった」「自分の気持ちは、勇気を出して伝えることが大事だと思った」「相手の気持ちを理解して人との接し方や相談の仕方、聴き方、言葉を考えて、友だちが相談しやすい環境をつくれるようにしようと思った」等の感想があった。

※　「ほっと」を年２回「心と身体のチェック」を年３回実施し、結果をデータ化し支援委員会で情報共有、全校教育相談に活用した。長期休業前後に実施したことや個別と集団の傾向を掴むことで、集団の関係性・環境作りと早期の個別対応につなげることができた。

取組の成果等

○　成果

グループワークを中心にコミュニケーション能力の育成と自殺予防教育を実施したことにより、生徒同士の関係が深まり良好な人間関係を構築する土台ができ、中途退学者の減少につながった。

○　課題

コミュニケーショントレーニングの実践で得た知識を本校の課題にマッチしたプログラムへの最適化を図るため、継続的、組織的に実施する体制づくりを進める必要がある。

○　次年度に向けて

・校内研修を計画的に実施し、教職員全体でスキルアップを図り教育相談体制を充実させる。
・生徒が学んだスキルを生かす機会を確保し、生徒自身が成長を実感できる環境作りに努める。

北海道標茶高等学校

課　程：全日制
学　科：総合学科
生徒数：172 名

本校の目指す生徒像

「人」、「自然」、「食」を主体的で協働的な探究により、実学を通して生命を尊び多様性を認め合い、豊かな人間性を持った生徒を育成する。

本校の現状

中学校まで不登校だった生徒及びコミュニケーションに不安を抱き入学する生徒が年々増加している傾向が見られる。

本校の取組の特徴

１　全教職員による組織的な教育相談
２　外部講師等の積極的な活用

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

１　全教職員による組織的な教育相談

教育相談（年間３回／１人）の実施（年度始めや長期休業明けの心の変化が大きい時期に生徒全員と面談を行い、学校生活及び家庭等の悩みを相談して悩み解消に向けて実施しています。）

１回目（５月）１年次(担任、副担任、学年付)で実施。
２回目（８月～９月）生徒による面談希望者の選択による実施。
３回目（１月）生徒による面談希望者の選択による実施。

※生徒の声
・話がしやすい先生を見つけることができてよかった。（女子）
・長期休業明けに学校に行くのが辛かったが、先生と面談をしたことで学校に登校しやすくなった。（男子）

２　外部講師等の積極的な活用

２名が来校し、生徒の希望により、カウンセリングを実施している。その後、担任及び養護教諭等と情報共有を行い、指導上の参考としている。

※　夏季休業前と夏季休業明けに「心と身体のチェック」のチャートを使い、教職員間で教育相談の資料として活用した。

取組の成果等

○　成果

教育相談とスクールカウンセラーとの面談を年間を通して実施したことにより、生徒の悩みに早期に対応することができた。

○　課題

教育相談を実施する際の担当教職員を生徒の希望制としていることから、面談を行う生徒の数が異なるため、教職員間で負担感に差があり、各教職員間の業務量等を把握した上で実施する必要がある。

○　次年度に向けて

・教育相談において、教職員の負担が偏ることなく実施できるよう、生徒の希望の取り方を工夫する必要がある。
・現在の取組を継続し、生徒が安全・安心に学校生活を送られるよう支援にしていく。

北海道別海高等学校

課　程：全日制
学　科：普通科
　　酪農経営科
生徒数：297 名

本校の目指す生徒像

・基礎的な知識・技能を習得し学びを継続できる人
・多様な価値観を理解し自己発信を行い他者と協力できる人
・物事に挑戦し試行錯誤する人

本校の現状

僻地の少人数の中学校から入学する生徒が多く、新しい人間関係の中に入ることに対し、ためらいや不安、悩みを抱えている生徒が見られる。

本校の取組の特徴

１　仲間づくりワークショップ（コンセンサスゲーム）の実施
２　ピア・サポート講座の実施と町内の放課後等デイサービス施設の訪問

取組の内容

○　人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

１　仲間づくりワークショップ（コンセンサスゲーム）の実施

・第１学年「宿泊研修」（５月）において、ネイパル厚岸指導員による「仲間づくりワークショップ」を実施した。
・内容は、コンセンサスゲームの１つである「ＮＡＳＡゲーム」（宇宙で遭難した状況で母船にたどり着くために、利用可能な 15 個のアイテムに優先順位を付け、ＮＡＳＡが示した模範解答を目指し競い合うゲーム）を行った。（※ ＮＡＳＡ：アメリカ航空宇宙局）
・生徒からは、「個人で考えるより、みんなで考えた方がよい結果となった」「今まで知らなかったクラスの友達のことが分かった」等の意見が多く聞かれた。

２　ピア・サポート講座の実施と町内の放課後等デイサービス施設の訪問

・全学年の希望生徒を対象に、放課後、本校教育相談担当教員による「ピア・サポート講座」を年 15 回実施した。
・参加生徒は、町内の放課後等デイサービス施設「こども広場ひかり」を訪問し、多様な児童生徒と交流する取組を行い、訪問に当たって、事前打合せや事後報告会を実施し、生徒同士、よりよい交流の在り方について話し合う活動を通して、支え合う力の育成に役立てている。
（※　放課後等デイサービス：障害などのある児童生徒が放課後や長期休業中に利用できる福祉サービス）
・生徒からは、「人と交流することの楽しさを知った」「誰かの心の支えになり、笑顔にするようなサポートをしたい」等の意見が聞かれた。

※　「ほっと」の分析

４月と９月に第１学年で実施した「ほっと」の結果を比較すると、「感謝の気持ちを伝えることができる」の項目で、3.7 から 3.8 へ 0.1 ポイント上昇、「本音を話すことができない」の項目で 2.7 から 2.5 へ 0.2 ポイント下降していることから、よりよい人間関係づくりが進んでいるものと判断し、学年・学級経営の参考にしている。

取組の成果等

○　成果

・宿泊研修における「仲間づくりワークショップ」や放課後の「ピア・サポート講座」により、生徒間で認め合ったり支え合ったりする雰囲気が高まり、協働して学習する場面では意見が活発になったほか、友人関係の悩みに関する相談が減少した。

○　課題

・「ほっと」「アセス」「心と身体のチェック」等について、結果を学校全体で共有し、学習や部活動に活用することができていないため、効果的な活用方法や校内体制を構築する必要がある。

○　次年度に向けて

・「ほっと」などの活用について検討するチームを編成し、実施時期や結果の共有、活用場面などを示した「活用計画」を策定するとともに、校内研修を実施して教員のスキルアップを図る。

高校生ステップアップ・プログラム実施要項

（平成25年５月17日学校教育局長決定）
（平成28年５月20日一部改正　　）
（平成30年４月６日一部改正　　）
（平成31年４月19日一部改正　　）
（令和２年４月10日一部改正　　）
（令和３年５月６日一部改正　　）

１　趣旨

高校生のいじめや不登校、中途退学の背景として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものもあり、心の不安定さからいじめや不登校、中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、北海道学校保健審議会の調査では、自殺や死について考える児童生徒が一定程度いるという結果が出ていることから、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校におけるいじめや不登校、中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組（以下、「集団カウンセリング」という。）や、自殺予防教育プログラムを活用した取組を実践するとともに全道の高等学校への普及を図る。

２　事業の実施主体

(1) 本事業は、北海道教育委員会（以下「委員会」という。）が実施する。
(2) 本事業は、文部科学省の委託を受けて実施することができる。

３　事業の内容

(1) 高等学校の取組

ア　集団カウンセリングの実施

実施校は、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るため、計画的に集団カウンセリングを実施する。

イ　自殺予防教育の取組の実施

実施校は、「自殺予防教育プログラム」を積極的に活用し、計画的に自殺予防教育の取組を実施する。

ウ　外部人材を活用した取組の実施

(ｱ) スクールカウンセラーによる支援

実施校は、生徒への集団カウンセリングやアセスメントの実施及び本事業の実施のための指導助言、教員研修等に、積極的にスクールカウンセラーを活用する。

ただし、スクールカウンセラーの活用時間数については予算の範囲内とする。

(ｲ) 北海道いじめ問題等解決支援外部専門家チーム員（以下「支援チーム員」という。）の活用

実施校は、生徒指導上の諸課題の解決に向けた取組の教員研修等に、積極的に支援チーム員を活用する。

エ　成果の検証

実施校は、本プログラムの成果を、次の(ｱ)から(ｵ)の項目により検証する。

(ｱ) 子ども理解支援ツール「ほっと」等を用いた客観的な指標に基づく評価

実施校は、「ほっと」等による調査を複数回実施し、上記ア、イに掲げる取組の成果を検証する。

(ｲ) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率の変化

(ｳ) その他の生徒の状況

・上記ア、イの取組における生徒の感想
・上記ア、イの取組における生徒の活動状況の観察

(ｴ) 外部人材の活用状況

(ｵ) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

オ　学校プログラム（成果のまとめ）の作成

実施校は、上記ア～エの実施状況、成果や課題を踏まえ、他校の参考となるよう、実施時期や内容、参考資料等を取りまとめた学校プログラム（成果のまとめ）を作成する。

(2) 委員会の取組

ア　運営協議会の開催

委員会は、本プログラムの円滑な実施に資するため、実施校の職員、スクールカウンセラー、所管教育局高等学校教育指導班担当指導主事等の参加を得て運営協議会を開催する。

イ　集団カウンセリング研修会の開催

委員会は、実施校における取組の充実を図るため、実施校の教員等を対象に集団カウンセリング研修会を開催する。

ウ　取組状況の広報

委員会は、全道立高等学校における不登校や中途退学の未然防止、自殺予防の取組の充実に役立てるため、本プログラムの取組状況の広報に努める。

エ　北海道教育カウンセリングＩＣＴ活用事業による支援

委員会は、スクールカウンセラーの継続的な派遣が困難な地域に対し、音声と映像の双方向情報通信技術を活用した北海道教育カウンセリングＩＣＴ活用事業により支援する。

ただし、実施校数には限りがあること。

4　事業実施に当たっての留意事項

(1) 実施校は、事業終了後においても、学校独自でプログラムを継続的に実施することを想定した計画の策定及び検証を行うこと。

(2) 実施校は、スクールカウンセラーによる予防的・開発的教育相談の手法や集団カウンセリング、アセスメントに関する教員研修を実施し、知識や手法の習得の他、本プログラムに関する教員間の共通理解を深めること。

(3) 高校１年生に重点を置いて本プログラムを実施する場合は、宿泊研修において、仲間づくり支援やコミュニケーションスキルを育成する集団カウンセリングを実施すること。

また、国立・道立青少年教育施設において宿泊研修を実施する場合は、当該施設職員と連携し、集団カウンセリングを実施すること。

(4) スクールカウンセラーによる生徒への集団カウンセリングや教員研修は貴重な機会であることから、実施校は支障のない範囲内で、近隣校と連携して実施してよいこと。

(5) スクールカウンセラーの活用については、次の事項に留意すること。

ア　スクールカウンセラーの人材確保については、実施校が行うこと。ただし、必要に応じて委員会が協力すること。

イ　予防的・開発的教育相談の手法は多様であることから、必要に応じて複数のスクールカウンセラーを活用してよいこと。

ウ　スクールカウンセラーの任用、報酬等の支給事務等については、「北海道公立学校スクールカウンセラー（非常勤）設置要綱」（令和３年３月31日学校教育局長一部改正）によること。

(6) 支援チーム員の派遣については、「北海道いじめ問題等解決支援外部専門家チーム実施要項（令和２年３月31日学校教育局長一部改正）によること。

5　実施期間

原則として１か年とする。

ただし、１年を超えて継続の希望がある場合は、取組状況や事業成果等に基づき委員会が継続を決定する。

6　事業の実施手続

(1) 事業の実施を希望する道立高等学校は、実施計画書（別記様式１）及び所要経費計画書（別記様式２）を添付し、委員会に申請する。

(2) 委員会は、上記(1)により提出された実施計画書等の内容を審査し、実施校を決定する。

(3) 実施校は、実施計画書等の内容を変更する場合は、速やかに委員会に報告し、その指示を受けること。

7　事業の報告

(1) 実施校は、実施報告書及び所要経費報告書を作成し、当該年度の指定された期日までに、委員会に提出すること。

(2) 支出関係書類については、他の経費と区分して適当な帳簿を用いて整理し、使途を明らかにするものとし、事業を実施した翌年度から５年間保存すること。

8　その他

(1) 委員会は、必要に応じ、事業の実施状況及び経理状況等について実態調査を行うこと。

(2) この要項に定めのないものは、委員会及び実施校が協議の上、決定すること。

附　則

この要項は、平成25年５月17日から施行する。

この要項は、平成28年５月20日から施行する。

この要項は、平成30年４月６日から施行する。

この要項は、平成31年４月19日から施行する。

この要項は、令和２年４月10日から施行する。

この要項は、令和３年５月６日から施行する。